

『言葉集』注釈(四)

穴井潤
小林賢太
中村文

凡例

本稿は、冷泉家時雨亭文庫蔵『言葉集』下(冷泉家時雨亭叢書 第七卷『平安中世私撰集』所収、朝日新聞社、一九九三年)を底本とする翻刻本文を掲げ、それぞれの和歌について、【整定本文】【本文に関する注】【現代語訳】【他出】【詠出機会】【作者】【語釈】【補説】の各項を立て、適宜注を施したものである。歌番号は『新編国歌大観』第十卷所収『言葉集』に従った。今回は雑上部224〜230番歌を取り上げる。各歌の注釈の末尾に、それぞれの担当者を()内に示した。担当者は輪読時に報告を行い、三者による議論を踏まえて原稿を執筆した。注釈の内容については、各担当者が責任を負う。

翻刻本文は、改行等をも含めて、できうる限り底本の原態を残すよう努めた。虫損等で判読が困難な文字は□で示し、字体の推定が可能な場合には、□の右傍に「(○歟)」として示した。ミセケチ記号は「ピ」に統一した。

【**整定本文**】 詞書・和歌ともそれぞれ一行書きに改め、濁点・句読点を付し、歴史的仮名遣いに改めた。判読が困難な箇所 で推定が可能な場合には、推定した文字を示した。

【**本文に関する注**】 重書や反転を指示する記号等、翻刻では示しきれない本文上の特徴について記した。

【**現代語訳**】 できる限り本文に忠実な通訳を試みた。言葉を補った場合には（ ）内に記した。

【**他出**】 『言葉と歌集』所収の和歌が、他の文献（南北朝期以前）に見える場合に、これを示した。和歌作品に見える場合は、特に断らない限り、『新編国歌大観』に拠る。それ以外の文献については、それぞれ典拠を示した。

【**詠出機会**】 当該歌が歌合・歌会・定数歌等の和歌行事において詠出されたものである（含推定）場合に、伝存する歌合本文や諸歌集などの資料によって知りうる情報を示し、参考文献を掲げた。

【**作者**】 当該和歌の作者に関して簡略に解説し、参考文献を掲げた。

【**語釈**】 和歌の解釈に必要な語句や、特に注意すべき事項に関する解説を示した。

【**補説**】 和歌の作意や現代語訳には示しがない含意、集内における配列意識、また、政治社会など時代性との関連や和歌史上における意義等について記した。

なお、古典作品の引用に当たっては、韻文については特に注さない限り、『新編国歌大観』に、散文については、『日本古典文学大系』、『新日本古典文学大系』（以上、岩波書店）、『新編日本古典文学全集』（小学館）に拠る。表記等については改変する場合がある。

返シ 神祇伯頭仲

224 イノルトモオイキノマツハクチハテ、

イカテカチヨラスクヘカルラン

【整定本文】 返シ

神祇伯顕仲

イノルトモオイキノマツハクチハテ、イカデカチヨラスゲベカルラン

【現代語訳】 返し

神祇伯顕仲

（長寿を）祈ってくれたとしても、古い木の松は朽ち果ててしまわずに、どうやって千代もの長い月日を過ごすことができるだろうか。

【他出】『新千載集』雑上・一六六六

返し

神祇伯顕仲

祈るとも老木の松は朽ちはてていかでか千代をすぐべかるらむ

【作者】源顕仲。顕房男、母は定成女。康平七年（一〇六四）生、一説に康平元年。父顕房は勅撰集入集歌人で、雅実・国信・雅兼など兄弟にも著名歌人が存する。子には、女流歌人として有名な堀河・兵衛をはじめ、大夫典侍・忠季（忠房）・有房などがある。康和四年（一一〇二）に非参議従三位に叙され、保安三年（一一二二）二月に神祇伯に任じられる。保延四年三月二九日没。笙の名手として知られ、管絃の才によって堀河天皇・中宮篤子の近臣となった。『堀河百首』『永久百首』の詠進、六条家系の歌会・歌合に多く出詠するなど歌人として活躍し、西宮歌合・南宮歌合・住吉歌合などの社頭歌合を催行した。《参考文献》山田洋嗣「神祇伯顕仲伝の考察」（『立教大学日本文学』三六、一九七六年七月）

【語釈】○イノルトモ 「トモ」は逆接の仮定条件。贈歌の「チヨライノラン」を受けて、そのように長寿を祈ってくれたとしても、の意。○オイキノマツハクチハテ、新編国歌大観本文では『言葉集』『新千載集』ともに「くちはてて」につくるが、歌意からは「くちはてで」と取るべきである。「やどしむる鶴の八千よの老木までいかにくちせぬ松のちぎりぞ」（百詠和歌・六一）のように長久の象徴である松は「朽ちせぬ」という捉え方

が一般的で、「クチハテ」は「ときしらぬ 谷の埋木 くちはてて むかしの春の 恋しさに……」（久安百首・一一〇一・堀河）のように埋木に対して用いられることが多い。当該歌では223【語釈】太政大臣歌のように老いて亡くなることを表すが、「クチハテッ」と解することで、「祈りのおかげで長生きする」という意になる。○イカデカチヨラスグベカルラン 「イカデカ〜ラン」は「ふゆの池のうへは水にとぢられていかでか月のそこに入るらん」（拾遺集・冬・二四一）、「あづまちはなこそそのせきもあるものをいかでか春のこえてきつらん」（後拾遺集・春上・三・師賢）のように、上句に対して「どうやって〜だろう」と、とほけてみせている諧謔的な表現。当該歌では、堀河（娘）と稚児（孫）が長寿を祈ってくれることで古い木が朽ち果てない＝長生きするとしても、千代もの長い月日をどのように過ごせばよいか、と詠む。

【補説】堀河が子日の松に添えた歌に対して、孫の代わりに顕仲が返歌している。『源氏物語』太政大臣歌を踏まえてつづ、「貴方たちが祈ってくれるのは有難いけれど、それ程長生きしてもどのように過ごせばいいか」と、冗談めかした歌を返す。春の景物として若菜を詠む贈答歌として配列される。（穴井）

霞ノ心ヲ 俊頼朝臣

225 ハルキヌトキ、タニアカヌアケホノニ

カスミソムスフマノ、ハキハラ

【整理本文】 霞ノ心ヲ

俊頼朝臣

ハルキヌトキ、ダニワカヌアケボノニカスミヅムスブマノ、ハギハラ

【本文に関する注】歌二句「ア」の右に「ワ」と傍書、整理本文には「ワ」を採用する（【語釈】）。四句「カス」は重書。

【現代語訳】「霞」というテーマを

俊頼朝臣

「春が来た」と（鳥の声を）聞いて判断することさえできない夜明け方に（霧なのか分からない）霞が集まっている、真野の萩原。

【他出】『源木工集』（新編私家集大成「俊頼Ⅲ」）一五

かすみのうたとよめる

春さぬとき、たにわかぬあけほのかすみにむせふまの、はきはら

○『散木奇歌集』一五

霞の歌とよめる

春さぬと聞きだにあへぬあけぐれにかすみにむせふまのはぎ原

○『袖中抄』一〇六五

春さぬとききだにあへぬ明けぐれに霞にむせぶ真野のはぎはら

○『夫木和歌抄』四六六

春来ぬとききだにあへぬ明けぐれにかすみにむせぶま野の萩原

【作者】源俊頼。生没年は天喜三年（一〇五五）～大治四年（一一二九）十一月以前。父は源経信で、母は源貞亮女。藤原頼通息橘俊綱の養子だった時期がある。子に俊恵がいる。長治二年（一一〇五）に木工頭に任じられ、天永二年（一一一一）に退任した。和歌・管絃に優れ、堀河院歌壇を領導する。『堀河百首』を企画・詠作し、『金葉和歌集』を単独で撰集するなど中世和歌の揺籃期を支え、革新的な歌を多く詠んだ。高陽院七番歌合をはじめ多くの歌合に参加し、国信卿家歌合のように詠者兼判者としても活躍した。極官が従四位上木工頭と官途は不遇であり、そうした境遇を嘆く傾向も存する。連歌に注目し、『金葉集』に勅撰集では異例の連歌部を立てた。私家集に『散木奇歌集』、歌学書に『俊頼髓脳』が残る。《参考文献》橋本不美男『院政期の歌壇史研究』（武蔵野書院、

一九六六年)、関根慶子『中古私家集の研究』(風間書房、一九六七年)

【語釈】○霞ノ心 はやく『万葉集』に「寄霞」(巻十・一九〇九)などの題詞が見え、天徳四年内裏歌合等の平安中期歌合の題として用いられた。歌会における春の主要な題の一つ。「はるたつといふばかりにや三吉野の山もかすみてけさは見ゆらん」(拾遺集・春上・一・忠岑)のように、「たつ」の掛詞によつて霞を立春の象徴とする詠法も、古来より少なくない。○ハルキヌト 春の到来を告げるのは「春きぬと人はいへどもうぐひすのなかぬかざりはあらじとぞ思ふ」(古今集・春上・一一・忠岑)「春きぬとまづつげがほに鶯のこだかきえだにふりいでつ鳴く」(元真集・七八)のように、春告鳥とも称される鶯の声が一般的で、「キ、」と続くことから当該歌も鶯声を含意する。「ハルキヌト」とともに霞を詠んだ例は「かすみだにたちおくれせば春きぬとなにをしるしに人もしらまし」(能宣集・六八)があるものの、当該歌以前にはほとんど作例が見当たらない。○キ、ダニワカヌ 「キ、ダニワカヌ」は当該歌以前には「いづかたとききだにわかすほととぎすただひとこゑのころまどひに」(後拾遺集・一九七・嘉言)などの例があるが、「郭公ききだにわかぬ一こゑの面かげのみぞあり明の空」(正治後度百首・八一七「郭公」宮内卿)、「この葉かとききだにわかぬむらしぐれもらですぎぬるおとぞすくなき」(千五百番歌合・冬一・二七五八・隆信)と新古今時代に詠まれている。当該歌は「春が来た」と聞き分けることさえできない」の意で、「はるやとき花やおそきとききわかむ鶯だにもなかずもあるかな」(古今集・春上・一〇・言直)を想起させる。前掲忠岑歌を踏まえ、鶯の声を聞くことさえできないため自然物によつて判断することができない、と解する。「アカヌ」では「まだ満足できていない」、すなわち、すではっきりと鶯の声を聞いていることになるため、傍記を採用して「ワカヌ」と訂する。○アケボノニ 夜明け方。同時代に「あけほのかすみこめたる花よりもあかぬはいもがにほひなりけり」(永久百首・六四五「妓女」大進)とも詠まれており、院政期ごろから霞と曙を取り合わせる歌が現れた。○カスミゾムスブ 他例は見当たらず、他出はいずれも「かすみにむせぶ」とする。

漢詩においては「咽霧山鶯啼尚少 穿沙蘆筍葉纒分」（和漢朗詠集・六五「鶯」元稹）のように霧に咽ぶ鶯の例が知られるが、「かすみ+むすぶ」も当該歌以前の例はほとんど見出せない。「かすみ+むせぶ」は「ともがほに鶯ばかりおとづれて霞にむせぶ春の山ざと」（出観集・三〇）、「うき身にてきくもをしきはうぐひすの霞にむせぶあけぼのの山」（山家集・二四）のように鶯との取り合わせで詠まれる。「かすみ+むすぶ」は新古今時代の歌人によって「おほよどの霞吹結ぶ松風に恨みでのみやかりかへるらん」（最勝四天王院和歌・三二四「大淀浦」俊成卿女）、「おくあみの霞をむすぶ春風に浪のかざしの花ぞさきそふ」（拾遺愚草・寛喜女御入内和歌・二〇九三「網」）などのように詠まれるものの、「風によって結ばれる（集められる）」と当該歌と異なる趣向で用いられている。当該歌の「むすぶ」は霞が一带にまとまっている様子と解する。元稹詩のように、萩原一带にむせかえるほど霞が立ち込めた情景を描写している「かすみにむせぶ」が本来のかたちと考えたい（補説）。「カスミゾ」と強調するのは「よしのやまゆきかふあともたえにしをかすみぞはるのしるべなりける」（中務集・二二二）、「いつしかと朝のはらにたなびけば霞ぞはるのはじめなりける」（堀河百首・四八「霞」河内）のように春の到来を象徴するためであろう。まだ鶯の声が聞こえないので聴覚的にはわからないが、霞によって視覚的に春の訪れを感じることができるところを詠んでいる。○マノ、ハギハラ 『万葉集』に詠まれる「真野乃榛原」が訛伝した歌語。平安中期の作例は見当たらない。『万葉集』二八一「番歌が「しらすげのまのはぎはらゆくさくさきみこそ見らめまのはぎはら」（綺語抄・三六〇）と表記されることから、院政期歌学の発展にともない再発見された歌語と考えられよう。「お露のしづ心なき秋風にみだれてさけるまのの萩原」（堀河百首・六〇七「萩」紀伊）、「霧をいたみまのの萩原時雨れしてしづくに袖をおどろかしつる」（永久百首・五二九「原」俊頼）など、同時多発的に詠まれるようになる。萩は本来秋の景物であるため、霞とともに詠んだ例も春歌として詠んだ例も見出せず、当該歌以外に「真野の萩原」を詠んだ俊頼歌三首も春歌ではない。初・五句では「春―秋」が対比されており、萩に含まれる「秋」を春歌に

詠み込むという理知的な趣向のために用いられたか。

【補説】秋の代表的な景物である萩の野原を、春の景物である霞が覆う情景を詠む。「カスミ」と詠みながらも、秋と錯覚する景を設定することで、季節感を惑わせる点が一首の眼目だろう。春歌に萩を詠むことは異例であるが、「春―秋」を同時に詠み込む意図による言語遊戯的な趣向といえる。「春が来た」と聞く「霞がむすぶ（に咽ぶカ）」は驚を連想させる表現であり、縁語的な歌語のむすびつきによって非在の驚を想起させながら、まだその声を聞くことができているため、視覚的な自然物だけでは春と判断することができない様子を表現する。頭から順に読み進める（あるいは耳で聞く）と、「春―霞」の取り合わせによって春の景のイメージが膨らむのだが、結句に「萩原」を置くことによって読み手（聞き手）の期待を裏切る構成になっており、歌語の配置にも意を尽くしていることが知られる。

当該歌は諸歌集相互に異同が存する。特に二三句「キ、ダニワカヌアケボノニ」は、当該歌の表現意図を探る上で注意される。『源木工集』は「ききだにわかぬあけほのに」、『散木奇歌集』『袖中抄』『夫木抄』は「ききだにあへぬあけぐれに」と俊頼の家集間に異同があり、『散木奇歌集』諸本には異同が見られない（関根慶子他『阿波本散木奇歌集本文校異篇』風間書房、一九七九年）。まず「わかぬ―あへぬ」については、「わかぬ」では「聞き分けさえできていない」とまだ聞き分けることができないう状況になるが、「あへぬ」では「聞くことができている」ことになり、後者の方が一層春の到来を知らせる情報が欠けている。また、「あけほの―あけぐれ」は夜明け方と未明で、後者の方がより薄暗く状況を把握しにくい時間帯を設定している。すなわち、いずれの異同も『散木奇歌集』の方が春と知るための要素が欠けた状況を作り出す本文になっている。当該歌の表現が季節感を惑わせる点にあるならば、『散木奇歌集』系本文の方が「わからなさ」を強調する意識によって一首をまとめているといえる。①『散木奇歌集』において異なる点、②『源木工集』は歌数・歌順・本文に大きな異同が存し、俊頼の推敲過程

を窺わせる家集である点（川村晃生解題執筆、冷泉家時雨亭叢書24『散木奇歌集』朝日新聞社、一九九三年）を踏まえれば、この異同は俊頼自身の手による改作と考えるべきか。『散木奇歌集』『源木工集』が一致する四句「かすみむせぶ」は、辺りを覆う濃密なもやによって、ただでさえ曖昧な状況をさらに臙化させる表現であり、ここまで見てきた二三句の表現意図と響き合う。一方の「むすぶ」からは収斂するイメージが想起され、二三句の表現と合致しないように思われるため、『言葉集』独自の異同「カスミゾムスブ」は歌意を鑑み誤写かと推測したい。

【本文に関する注】に記した傍書は「わかぬ」本文を持つ伝本をもって訂されたことを示しており、撰集ないし書写段階で『源木工集』を参照した蓋然性は高い。一三句の一致から『源木工集』が『言葉集』撰集資料であったと想定したくなるが、152番歌の俊頼歌では『散木奇歌集』系本文と一致する（『源木工集』のみ独自本文を有することから、どちらが撰集資料であったかは判断しがたい。あるいは、両集とも所持しており、必要に応じて利用していたか。）

（穴井）

山寺ニ籠給ケルニ霞籠

山家トイフコトヲ同行トモ

ヨミ侍ケル

花蔵院法印

226 タツネイルヤマチモミエスカスムマハ

トハヌヒトヲモナニカウラム

【整定本文】

山寺ニ籠給ケルニ、霞籠山家トイフコトヲ、同行ドモヨミ侍ケル

花蔵院法印

タヅネイルヤマヂモミエズカスムマハトハヌヒトヲモナニカウラム

【現代語訳】

山寺にお籠もりになられた時に、「霞籠山家」ということを、同行たちが詠みました（時） 花蔵院法印

（山中に）分け入っていく（ための）山路も見えないほど霞む間は、（誰も山奥に入れないので）尋ねてこない人をどうして恨もうか（恨むことはできない）。

【作者】元性↓314。

【語釈】○山寺二籠給ケル 西行『山家心中集』には、「寂然高野まいりて、深山紅葉といふことを、宮法印御庵室にてよむへきよし申侍しに、まいりあひて」（二三七）、「宮法印かうやにこもらせたまひて、ことのほかにあれさむかりし夜、こそてたまはせたりしまたのあした、たてまつり侍し」（二九六）のごとく、高野山での元性との交流の様子が記される。特に前者は元性の庵室で歌会が行われていたことを示すものであり、当該歌も高野山時代に詠まれたと推測する。○霞籠山家トイフコト 「やまざとのやどは霞にこめたれどかきのやなぎのすゑはとにみゆ」（嘉言集・九六「かすみ、山のいへをこむ」）が先行する同題詠と思しいが、他例はほぼ見当たらない。「霞籠」は「霞籠棹山」（国基集・一）、「霞籠帰雁」（出観集・二二二）、「霞籠寺深」（貧道集・四二二）などが見え、平安中後期ごろから歌題として用いられている。一方、山家と霞を共に用いた題は散位広綱朝臣歌合に「霞籠山家」が残る（『和歌一字抄』は前掲嘉言歌も「霞籠山家」題とする）。「籠」と「隔」では作例を見る限り詠み方に大差はなく、ともに霞によって外界と山里とが分断され、その景色を外部から眺める様子を詠む。ただし、当該歌では内側から外界を思いやる詠み方になっている。「山家」は山里での暮らしのことで、『後拾遺集』時代から都の郊外を訪れたり、別邸を構えたりすることで多く詠まれるようになった。「山里の夕ぐれがたのさびしさをみねのあらしのおどろかすかな」（玉葉集・雑三・二二〇八・経信）。また、主に隠遁者によって「さびしさにたへたる人のまた

もあれないほりならべむ冬の山里」（新古今集・冬・西行）のように、山住まいの生活の様子やその寂寥感が詠まれた。○同行ドモ 信仰・修行を同じくする仲間、ここではともに歌を詠む仲間という意。前述したような出家隠遁した歌人などが想定できるか。○タツネイル 目的地へ進入することだが、山や異国など、自らの生活圏から離れた地の深奥へと向かう心境を含蓄する。平安後期ごろから頻出するようになり、多くは「はるふかくたづねいるかなたにがくれかぜにしられぬはなやにほふと」（貧道集・一三二「深山尋花」）のように山深くへと分け入る際に用いられる。○ヤマヂモミエズカスムマハ 「ヤマヂモミエズ」は散花・落葉・雪など散り敷く景物によって山路が埋もれてしまい、道が分からなくなるさま。「世のなかのうきたびごとにおもひたつ山路もみえず雪ふりにけり」（清輔集・二〇五）。当該歌は霞に籠められたことよって、山道が見えず尋ねられない状況を詠む。○トハヌヒトヲモ 「いかにしてわすることをならひけむとはぬ人にやとひてしらまし」（相模集・七〇）のように、訪れが絶えた恋人の意もあるが、「春たたばなびきやすくと青柳のいとしも人をなにかまつらむ／今よりはなびきしもせじあをやぎのいとくるしきをとほぬ人には」（定頼集・三二一～三二二「正月一日、源宰相かくいへる／返し」）のように、親しい間柄で無沙汰を咎める際にも用いられる。一方、「とふ人+なし（あらじ）」は「ひぐらしのなく山里のゆふぐれは風よりほかにとふ人もなし」（古今集・秋上・二〇五）以来、景物のみが訪れることを詠む際に用いられる。「山里はむしのねばかりおとづれてとふ人もなき秋の夕暮」（貧道集・四六五）、「とふ人のさらでもあらじ山里にふかくも道をうづむ雪かな」（長秋詠藻・五六五）など同時代の例も見える。○ナニカウラム 桜や郭公などにも用いるが、多くは「訪れの絶えた恋人を恨んだところで仕方ない」という心情を表す。「秋はてて時雨ふりぬる我なればちることのはをなにかうらみむ」（後撰集・冬・四四八）など平安中期に詠まれた。『拾遺集』時代以降しばらく作例が途絶えるが、「身のうきにをれふしぬればしをれあしの世をば難波のなにか恨みん」（長秋詠藻・一六二）のように平安後期ごろから再び詠まれ出し、自身の不遇を憂う際にも用いられるようになる。

【補説】春霞が立ち籠めることで山路が分からなくなってしまい、人が訪れられない様子を思いやった歌。雪で道が閉ざされることを詠む冬歌は多く、「待つ人のふもとのみちはたえぬらのきばのすぎに雪おもるなり」（新古今集・冬・六七二・定家）などは、自然現象によって行路が埋もれる様を思いやる点が当該歌の詠みぶりに近い。当該歌では春においても霞が道を閉ざすと詠むことで題を満たしており、雪によって詠まれる景を霞に言いなしたずらしが一首の趣向と考えられる。また、下句は恋歌的表現を用いており、「ウラミ」という語を詠み込むことで「山寺ニ籠給ケル」状況における寂しさの実感をも仄めかしている。山里の寂しさは「とふ人もおもひたえたる山ざとのさびしきなくはすみうからまし」（山家集・九三七）のように出家隱遁歌人がよく詠んだ題材であった。

（穴井）

公通卿家ニテ晚霞ト

イフ事人ノヨミ侍ケルニ

藤原定長

227 サトノアマノトナリタツネニコキユケハ

カスミタチ□クアハノシマ山

【整定本文】

公通卿家ニテ晚霞トイフ事人ノヨミ侍ケルニ

藤原定長

サトノアマノトナリタツネニコキユケバカスミタチ□クアハノシマ山

【現代語訳】

公通卿家で晚霞という題を人々が詠みました時に

藤原定長

里の海士が隣を求めて（船を）漕いでゆくと、霞が立って（　　）いる、（鳥影も）かすかなあはの島山であるよ。

【詠出機会】公通家十首会。承安二年（一一七二）八月二五日催行（類題鈔）。晚霞・落花待郭公・夏草・水月・野風・残菊・旅雪・夜恋・竹為友の十題が設題され、実定・重家・頼政・頼輔・季経・公重・盛方・親宗・資隆・隆信・寂蓮・登蓮・祐盛・俊恵・観蓮（教長）・清輔の一七人の参加が知られる。定長（寂蓮）の作は、当歌の他、待郭公・夏草・夜恋題の全四首が残る。《参考文献》松野陽一『鳥帯 千載集時代和歌の研究』I（3）①（風間書房、一九九五年）

【作者】藤原定長。法名寂蓮。醍醐寺阿闍梨俊海（長家流俊忠男）の男。保延五年（一一三九）頃生。建仁二年（一一二二）七月二〇日以前に没。叔父俊成の養子となる。従五位上中務少輔に至り、承安二年（一一七二）頃出家。本集成立時にはすでに出家していたが、作者名表記は在俗時のものとなっている。少輔入道とも称される。仁安二年経盛家歌合、住吉社歌合、俊成家十首会、公通家十首会、別雷社歌合、安元三年右大臣家歌合等に出詠。また、『右大臣家百首』『二見浦百首』『結題百首』『花月百首』等の作者となる。鎌倉期に入ると、良経家歌壇の中心メンバーとなり、『十題百首』、六百番歌合に出詠。また、『御室五十首』に出詠。正治元年（一一九九）春の大内花見御幸に随行して詠歌し、翌二年以降は、『正治初度百首』や仙洞十人歌合、老若五十首歌合、新宮撰歌合、三体和歌等、後鳥羽院主催の和歌行事に参じた。和歌所寄人、ついで『新古今集』撰者となるが、撰進以前に没。『千載集』以下の勅撰集に一一六首入集。家集に『寂蓮集』がある。《参考文献》久曾神昇『顕昭・寂蓮』（三省堂、一九四二年）、山本一『慈円の和歌と思想』（和泉書院、一九九九年）、安井重雄『藤原俊成 判詞と歌語の研究』第一章、第二章（笠間書院、二〇〇六年）

【語釈】○公通 藤原公通。永久五年（一一一七）〜承安三年（一一七三）四月九日。五七歳。閑院流権中納言通季の一男。権大納言正二位に至り、按察使等を兼帯した。建春門院北面歌合、広田社歌合等に出詠。『千載集』以下の勅撰集に一二首入集。『歌仙落書』に入る。日記に『公通卿記』がある。中村文『後白河院時代歌人伝の研

究』第九章（笠間書院、二〇〇五年）参照。○晚霞 霞がかかる夕方の光景を詠むことを求める歌題。『範永集』に「ゆふべのかすみ」題で「ゆふさればたちもはれなむはるがすみながむるかたのこず多かくさじ」（七六）と見えるのが早く、『家経集』にも「望晚霞」題が見える（七）。範永歌に明らかなくとく、必ずしも海辺の光景を求める題ではないが、公通家十首会における当題では、「ゆふなぎに浦の戸わたるあまを舟霞のうちにこぎぞ入りぬる」（林葉集・二二五）、「なごのうみのかすみのまよりながむればいる日をあらふおきつしらなみ」（新古今集・春上・三五・実定）等、海辺の夕景を詠む歌が残る。○サトノアマ 阿波国に「里海」の地名があるが、詠歌史ではほぼ、「里に住む海士（漁撈従事者）」の意で用いている。当歌においても普通名詞として用いるか。「うらかぜになびきにけりなさとのおまのたくものけぶり心よわさは」（後拾遺集・恋二・七〇六・藤原実方）が例としては早く、平安期の例は多くないが、新古今時代にさかんに用いられた。寂蓮には、「さとのあまのたきすさびたるもしほ草又かきつめてけぶりたてつる」（続後撰集・羈旅・一三三四）の作も残る。○トナリタヅネニ 二字目「ナ」は一画目（横棒）の上部に突き出る部分の線が、横棒下部の線に比して細く、「マ（二十ノ）」である可能性も残るが、本典籍においては、「マ」をほぼ「一十、」の形で表記するので、ここでは「ナ」と翻刻した。【補説】参照。「尋ねに」は求めるために。末尾「ニ」は目的を示す格助詞と解した。○コギユケバ 「月影のあかしの浦をこぎ行けば千鳥しばなくあけぬこの夜は」（堀河百首・九七八「千鳥」匡房）等が例としては早く、平安末期によく用いられた措辞。「みやこ人心にかけてこぎゆけばしほみつうらにたづもなくなり」（頼輔集・七一「海路恋」）等の例がある。

○カスミタチ□ク 六字目に虫損がある。断定は困難だが、残画部は「カ」に近い。『新編国歌大観』は「メ」と見る。「霞立ちかく」の本文が認められれば、「霞が立ち掛かっている」意となる。○アハノシマ山 「むこのうみをなぎたるあさのみわたせばまゆもみだれぬあはのしまやま」（広田社歌合・六一「海上眺望」実定。『林下集』では五句「あはぢしまやま」等をはじめ、平安末期に作例が集中する。実定歌からも、「あはの島山」は淡路島を

指す語として理解されていたと推察される。『万葉集』の「マユノゴト如眉 クモキニミユル雲居尔所見 アハノヤマ阿波乃山 カケテコグフネ懸而榜舟 トマリシラスモ泊不知毛」（卷六・九九八・船王）に拠る語と考えられる。「ももづたふやその舟路の夕霞いくへ隔てつあはのしまやま」（長方集・四「浜辺霞」）、「おきつなみたちよるほどぞしられぬるあはのしまやま見えみみえずみ」（経盛集・九八「海上眺望」）、「波ごしにさやにもみえず月影の入りぬるほどやあはのしま山」（御室五十首・三九九・賢清）等、「あは」に「淡」を掛けて、「はつきりとは見えない」ものとして詠まれることが多い。

【補説】第二句は「トナリタヅネニ」と翻刻したが、「隣を尋ねる」とする表現は、他には「花さかぬやどぞとなりをたづぬらむおもひおこせよにはのいろいろ」（明恵上人集・一二五）以外には見出せず、当歌における動作の主体が「里の海士」であることを勘案すると、「隣尋ねに」の措辞には疑問が残る。元来は「トマリタヅネニ」であった可能性を考えたい。「泊まり」は舟が停泊する所。「泊まりを尋ねる」という表現は、嘉応二年（一一七〇）五月張行の美国家歌合の「九月尽」題歌、「いづかたを秋のとまりと尋ねまし紅葉の舟はちりぢりに行く」（四九・清輔）、「暮れて行く秋のとまりをたづぬればをしむ心のうちにぞ有りける」（五一・親宗）に見えるように、「季節が最後に行き着く先を慕い探す」意で用いる（その淵源は、『古今集』秋下・三一・貫之「年ごとにもみぢばながす竜田河みなとや秋のとまりなるらむ」に求め得よう）場合と、船が停泊地を求める意で用いる、「なるみがたとまり尋ねて行く舟を波間にやどす夕霞かな」（玄玉集・六八・覚盛）のごとき例がある。227番歌は後者の用い方である。なお、覚盛歌は場面設定が227番歌と類似しており注意される。

【語釈】「アハノシマ山」項に掲げた万葉歌は、『口伝和歌釈抄』『五代集歌枕』『和歌童蒙抄』等にも取り上げられ（『五代集歌枕』のみ五句「とまりすらしも」とする）、当代歌人たちは「あはの島山」の地名について、歌学書を通して関心を寄せた可能性もある。当該万葉歌は「はるか雲居に見えるのみの阿波の山を目指して漕ぐ船は、停泊場所を知ることがおぼつかない」とする内容だが、『和歌童蒙抄』の当歌注には「マユノゴト、ハ、アラキマ

ユスミノヤウニテホソクテハルカニミユルナリ」(引用は、黒田彰子『和歌童蒙抄注解』青簡舎、二〇一九年に拠る)と見える。227番歌に詠まれる、里の海人が停泊地を求めて目指す「あはの島山」が霞に包まれている光景は、万葉歌の示す、青黛で淡く刷いたかのように茫漠と見える島影のイメージを受け、また、万葉歌の五句「泊まり知られず」の内容も微かに揺曳していて、227番歌がこの万葉歌の影響下に発想されたことを推察させる。なお、源雅定が自家の十五首会で詠んだ「晚霞隔浦」題歌、「あはぢしまとわたるふねやたどるらむやへたちこむるゆふがすみかな」(新勅撰集・雑四・一三三四)は、淡路島を目指して航行する船が深く立ちこめた夕霞に迷っているとする内容で、227番歌と場面設定が共通する。雅定は応保二年(一一六二)没で、雅定歌は227番歌に先行するが、影響関係は不明である。前述した覚盛歌等と併せて、227番歌と類似する発想の作が同時代歌人によって繰り返し試みられたことがうかがえる。なお、225番歌から続く「雑部」の霞歌群がここで終わる。(中村)

山寺籠居侍ケルニ同行ミヤコ

ヘト(申歌)ケレハ

前律師俊宗

228 キケハマタミヤコノハナモサカナクニ

ナニウクヒスノイソキイツラン

【整定本文】

山寺籠居侍ケルニ、同行ミヤコヘト申ケレバ 前律師俊宗

キケバマダミヤコノハナモサカナクニナニウグヒスノイソギイツラン

【現代語訳】

（人里離れた）山寺に籠もっておりましたところ、一緒に仏道修行をしていた僧が都へ（出る）と申すので

前律師俊宗

聞いたところでは、まだ都の桜も咲いていないのに、どうして鶯（あなた）は急いで（都へと山を）出て行くのでしょうか。

【作者】前律師俊宗。伝未詳。同時代に編まれた『続詞花集』（二首）、『千載集』（一首）、『今撰集』（四首）に「前律師俊宗」の作者名で歌が採られる。以上の入集詠（重複を除き計四首）の作者は、228番歌作者と同一人と考えられる。また、『夫木抄』三二五六には「天治元年五月無動寺歌合、夜川」の詞書で「よかは船ともすかがりのみかりにはもにすむいをのかずもみえけり」の歌が、さらに、『袋草紙』には保安三年（一一二二）二月廿日張行の無動寺歌合（判者俊頼・基俊）における「僧俊宗」の「春雨」題歌として「さほひめのやなぎのいとほたえせねどたまぬくあめのかつこぼれつつ」が記される。『夫木抄』と『袋草紙』の「俊宗」は同一人物と推定しうる。『今撰集』三七には、「山寺歌合し侍りけるに、なほしろを」の詞書で前律師俊宗の「みな人のあらそひひけばなほしろの水は心にまかせざりけり」が入るが、保安三年二月の無動寺歌合では「苗代」題が設題されており（夫木抄・一八七三）、『千載集』他に入る「前律師俊宗」と、『袋草紙』『夫木抄』の「俊宗」とは同一人である可能性が高い。『和歌一字抄』に「山家春意」題歌が入る（五八二）「俊宗」もこの人物であろうか。『中右記部類』大治三年（一一二八）一二月三日条に「山俊宗」と見えるが、時代的には無動寺歌合に出詠の「俊宗」と重なり、延暦寺僧であったと推定される。『平安朝歌合大成』は村上源氏俊房子証観の男に「寺 律師 俊宗」と見える人物かとするが、無動寺歌合に出詠していることからすると適切な比定とは言い難い。『勅撰作者部類』は散位藤原親信子とする。『兵範記』『山槐記』の仁平〜保元年間の記事に現れ、鳥羽院や藤原忠通主権の仏事に奉仕し、近衛院の葬送に従った「已講俊宗」は別人物か。

【語釈】○山寺籠居

修行を目的として、同行者とともに深く険しい山中に身を置き、外界から遮断されたような生活を送る境遇を示すか。○同行 共に山寺に籠もり仏道修行をする仲間。↓226。○ミヤコノハナ 勅撰集では

『後拾遺集』初出の措辞。康資王母が関東に在した折、姉妹（源兼俊母）と交わした贈答歌、「にほひきやみやこのはなはあづまぢにこちのかへしのかぜにつけしは」「ふきかへすこちのかへしはみにしみきみやこのはなのしるべと思ふに」（後拾遺集・雑五・一一三三、一一三四）に明らかなく、实景を叙すよりも、むしろ地方（鄙）に身を置く者の心を強く惹きつける「都・中央」の象徴として詠まれる傾向がある。あるいは、「春くればいづれの谷のうぐひすも花のみやこにきつつ鳴くなり」（堀河百首・四九「鶯」公実）の「花」と同様に、春の象徴として、または場所や物に漠然と華やかさ添加する機能に重点が置かれる表現で、「花」が具体的に何の花であるのかは問われないのであろうか。ただし、「ながるすなみやこのはなもささぬらんわれもなにゆゑいそぐつなでぞ」（詞花集・雑上・二七五・平忠盛）には播磨守として任国にあった忠盛が、摂津国で塩湯浴みのために逗留していた藤原為通に贈った歌で、詞書に「三月ばかり」とあり、「花」は桜を指すと解せる。また、この忠盛歌では、²²⁸番と同じく、京都の桜を見たいと心急ぐ気持を、「いそぐ」の語を用いて詠んでいる。なお、「山たかみ峰の桜を尋ねてぞ都の花は見るべかりける」（玄玉集・五七六・俊恵）、「人はみなよしの山へ入りぬめり都の花にわれはとまらん」（山家集・一四五五）等、平安末期の作例には、実体として京に咲く桜が詠まれている。○ナニ いったいどうして。○イソギイヅラン 「鶯」と「急ぎ出づ」を取り合わせた歌に、「はるたちてふるしらゆきをうぐひすのはなちりぬとやいそぎいづらん」（後拾遺集・春上・一八・読人不知）がある。

【補説】「鶯」と取り合わされる「花」と言えば、『万葉集』以来「梅」がほとんどであり（鈴木宏子「梅と鶯の組合せ」考）『古今和歌集表現論』第一章IV、笠間書院、二〇〇〇年参照）、「かぜぬるみむめのはつはなさきぬればいづらは宿のうぐひすのこゑ」（高遠集・一六五「南枝暖待鶯」）も、梅の開花に鶯が誘引されて鳴き始めるとい

う発想による作である。しかしながら、「東山に花みにいきたるに、鶯いたくなく、京にはなかぬものをと人のいふに」の詞書が付された「都には花さきぬとやかたらまし山ほととぎすみにやいづると」（経信母集・一）の「花」は「桜」と解され、また、「潤底桜」題で詠まれた「みやこへやいでやこざらんうぐひすはおのがすみかはなにもつれて」（為忠家後度百首・二一・為業）の「花」は、「桜」であることが明らかである。以上のごとく、「鶯」と「桜」を取り合わせた作例が見え、また、「都の花」の措辞が「桜」を指す例のあることを併せて、228番歌の「花」を「桜」と解釈した。

一首の構成は、【語釈】「イソギイヅラン」項に掲げた『後拾遺集』読人不知歌を意識したか。「鶯は雪を見て花が散つたと勘違いして急いで山から出ると言うが、あなたは、桜が咲いてもいないのに、どうして山から出ようとするのか」のような歌意となる。「きけばまだ」も「さかなくに」も、これ以前の用例が見えない珍しい措辞で、口語的な言い回しであったと考えられる。山寺に籠居しての修行が辛かったことは西行の詠作等にもうかがえる。下山を希望する同行の僧に、都だつてまだ桜は咲いていないと語りかけて、山中での修行に引き留めようとしたのであろうか。（中村）

鶯帰谷ト云事

信西法師

229 ウクヒスノフルサトニスルタニナレハ

ハナノニシキヲサテカヘルラン

【整定本文】

鶯帰谷ト云事

信西法師

ウグヒスノフルサトニスルタニナレバハナノニシキヲサテカヘルラン

【現代語訳】

鶯帰谷という事

信西法師

鶯が（春の間）帰ることなく古びてしまった故郷の谷なので、（鶯は身に纏った）花の錦をそのままにして帰るの
だらう。

【作者】信西。嘉承元（一一〇六）年〜平治元（一一五九）年。藤原。俗名は通憲。父は文章生実兼。母は源有家女、一説に源有房女とも。七歳の時に父が急死したため、婚姻関係のあった高階経敏の養子となった。学者の家柄に生まれた博学多才であったが、他家に養子に入ったためか儒官に就くことはなかった。三十代後半で官途に見切りをつけて出家しようとするが鳥羽院に慰留され、天養元（一一四四）年、少納言に任じられる。その直後に藤原氏に復した。同年出家、法名円空、のち信西とした。出家後も鳥羽院に近侍し、妻の紀伊二位朝子が後白河院の乳母であったことも関係して、後白河即位後は権勢を振るった。政界の中心人物になるも、平治の乱により斬首される。鳥羽院の近臣であった藤原家成主催の歌合に出詠。『統後撰集』に一首入集。『本朝無題詩』に作品が残るほか、編者に『本朝世紀』『法曹類林』などがある。《参考文献》市古貞次「信西とその子孫」（『日本学士院紀要』四二、一九八七年十月）、山崎誠「藤原通憲の修辞学」（『講座平安文学論究9』風間書房、一九九三年）、元木泰雄「信西の出現―院の専制と近臣」（『立命館文学』五二二、一九九一年六月）

【語釈】○鶯帰谷 早春に谷から出てきた鶯が、晩春になって谷へ帰って行くことを示す題。当詠以前には見出せない。やや時代が下るが、『光経集』五六、『範宗集』七九、『紫禁和歌集』一一八二によると、承久二（一一三〇）年三月二四日の内裏当座歌合にて「鶯帰谷」が設題されている。『為家集』五〇にも「鶯帰谷承久三」、また『新続古今集』一六五〇にも「承久元年内裏歌合に、鶯帰谷といふことを」として信実の歌が載る。この二首の詞書が

承久二年の誤記であれば、これらは全て承久二年三月の順徳院歌壇における詠となる。歌は「うぐひすのかへるいへぢも花やなきたけのはやまの谷の夕かぜ」（光経集・五六）、「谷川に行く瀬の花はかへらねどおのがふるすに鶯ぞなく」（新続古今集・雑歌上・一六五〇）のように、花の散った晩春に谷へと帰って行く鶯を詠む。同様の内容を詠んだ歌に「はるかれて帰る鶯ことづてよ山ほととぎす我はまちきと」（重家集・一〇七「時鳥十首」）、「あはれいかに霞も花もなれなれて雲しく谷に帰る鶯」（定家卿百番自歌合・二八「右 百廿八首建久七年」）がある。

○ウグヒスノフルサトニスルタニ 詳しくは【補説】で述べるが、「春たたば花とや見えん白雪のかかれるえだに鶯ぞなく」（古今和歌六帖・二八・躬恒）、「うぐひすの谷よりいづること悉なくは春くることをたれかしらまし」（古今集・春上・一四・大江千里）のごとく、古来より鶯は春になると山や谷から飛んできて囀るものと考えられていた。春の終わりとともに再び山溪に帰って行くとされ、「鶯のおのがなくべき春かれて谷の故郷跡もとむらむ」（宝治百首・七七四「暮春」資季）のような歌もある。「フルサト」には「故郷（生まれ育った地）」の意に加え、「古里（荒れ果てて古びた地、古果）」の意も掛けられているであろう。○ハナノニシキ 錦を着て故郷に帰る、すなわち「衣錦還郷」は、古くは『漢書』『朱買臣伝』や『南史』『柳慶遠伝』に見え、広く知られていた。石清水若宮歌合（正治二年）では、源泰光詠「ふる郷へけふ帰れとやおもふらむ花のにしきをきする春風」（三八）が、判者通親に「右、買臣が錦をきて故郷にかへる事、詩歌ふりたることはなればめづらしからずや」と評され、負となっている。「花の錦」は「ふりそむる春雨よりぞ色の花の錦もほころびにける」（堀河百首・一七五・紀伊）のように咲く花を錦に見立てた場合もあれば、「ちりかかる花のにしきはきたれどもかへらむことぞわすられにける」（千載集・春下・九〇・実房）のように、散って降りかかった花びらを錦の衣に見立てる場合もある。当歌においては後者で、散った花びらが鶯に降りかかった状態を示している。「帰る」とともに詠まれた例としては先述『千載集』実房詠のほか、「こきませの花のにしきをはるかせにたちきてさとへかへるかりがね」（賀茂保憲女集・一六）などがある。

「衣錦還郷」を念頭に置いたものである。鶯と花とを取り合わせた歌は非常に多いが、「鶯・花・衣」を共に詠み込んだ例としては「春風のけさはやければ鶯の花の衣もほころびにけり」（拾遺集・物名・四一四「さはやけ」読人不知）がある。なお「あをやぎをかたいとによりて鶯のぬふてふ笠は梅の花がさ」（古今集・巻二十・一〇八一「かみ遊びのうた」）以降、「梅の花笠」という言葉がしばしば鶯と共に詠まれているが、鶯に落花が降りかかる様を衣装に見立てる点は本詠と共通する。○サテカヘルラン 五句目頭「サテ」とあるが、当歌が「衣錦還郷」を踏まえていることを考慮すれば「キテ」の方が適当であろう。平仮名で書かれた祖本の「き」を「さ」と見誤って書写した可能性があるが、ここでは底本に従い「さて」で解釈する。「さて」は指示副詞「さ」に接続助詞「て」がついた語で、いくつかの意味を持つが、本詠では「状態を変えずに・そのまま」の意で解す。「おもひわび見し面影はさておきてこひせざりけむをりぞこひしき」（新古今集・恋五・俊成・一三九四）などがその例である。

【補説】当該詠の歌題「鶯帰谷」は、春の終わりに鶯が谷に帰って行くことを示すが、この前提には、冬の間、谷に籠もっていた鶯が春になって出てくるという考えが存する。そしてこの発想は漢籍に由来する。以下、渡辺秀夫「谷の鶯・歌と詩と―〈典拠〉をめぐる―」（『中古文学』二二、一九八七年四月）、青木五郎「大江千里「鶯の谷より出づる声なくは云云」（『古今集』・春上）の典拠をめぐる―和漢比較文学ノート（四）―」（『中国文学・研究と教育』五五、一九九七年六月）両論に拠って述べていく。「谷の鶯」なる発想の原拠は、『詩経』小雅・伐木篇の一節「鳥ノ鳴クト嚶々タリ 出レテ自ニ幽谷ニ 遷ルニ喬木ニ 嚶トシテ其レ鳴キ矣 求ムル其ノ友ヲ声ニ 出ラシコトヲ 泉ニ 籠ノ鶯ハ悔レ出レレトヲ 谷ヲ」（白氏文集卷十「孟夏思渭村舊居寄舍弟」）等がその例だが、この白詩をはじめ、鶯が谷から出ることは、「官界で身を立てる・官吏登用される」ことの寓意でもあった。原典たる『詩経』伐木篇に付された毛伝にも「君子は遷りて高位に処ると雖も、以て其の朋友を忘るべからず」とある。「谷から出

る鶯」を純粹に春の景として詠む詩も存するが、多くは進士登第や立身出世を寓する表現として用いられた。『漢朗詠集』にも賈誼の作と伝えられる「鷄既鳴兮忠臣待旦（にはとすいでになてちゆうしんあしたまつ） 鶯未出兮遺賢在谷（うぐひすいまだいでてあけんたにあり）」（六三「鳳為王賦」）が収載されており、日本でも同様の理解であったと思しい。世に埋もれた不遇の身を「鶯谷」、立身や進士に及第することを「鶯遷」と言うのもこれらに拠る。青木論では、【語釈】に挙げた大江千里詠「うぐひすの谷よりいづること多きは春くるとをたれかしらまし」もまた、単なる春の景を詠じたのみならず、身の不遇をも寓している可能性を指摘する。おそらく信西も、これらの詩歌を念頭に229番歌を詠んだのであろう。すなわち信西詠は、【語釈】「ハナノニシキ」で示した『漢書』や『南史』に由来する「衣錦還郷」の故事と、鶯が谷を出ることに立身出世を重ねる『詩経』の内容をかけ合わせ、「郷里や朋友を思いながらも故郷を出て官界で栄達した者が、長らく無沙汰をしてしまった古巣に錦を着て帰る」という姿が浮かび上がる仕掛けになっているのではないか。「フルサト、スル」というやや独特な言い回しも、先掲してきた漢詩群を踏まえて、「長らく顧みることができなかつたため疎遠になり、寂れてしまった郷里」というニュアンスを生成するためかもしれない。さらに漢詩との関わりで言えば、『和漢朗詠集』の「送春不用動舟車（はるをわくるにはともせずししやをこかせしを） 唯別殘鶯与落花（ただんあしらくわにわか）」（五三・道真「三月尽」）のように、去りゆく春を落花と鶯にこと寄せて詠う詩もある。漢詩の世界を幾重にも重ねた当該歌は、漢籍に精通した信西らしい詠みぶりと言えよう。

なお、当歌は『言葉集』雑上の前半部、比較的春の初めを詠んだ歌が並ぶ中に置かれている。これより後方、晩春の歌と並べた方が季節の流れとしては自然だが、直前228番歌にも鶯が詠まれているため、鶯の歌をまとめて並べものと推測される。また228番歌は山を下りて都に行こうとする同行に向けての歌であり、置いていかれる者の立場で詠まれている。本229番歌はそれを反転させるように、都へ行くために谷を出て行った者の立場で詠まれており、その対比を興じた配列かもしれない。また当該歌の背景に読み取れる立身出世は都での栄達を示してい

るであろうから、第四句の「花の錦」は都の花ということになる。228番歌に詠み込まれた「都の花」との繋がりも浮かび上がってくる。
(小林)

柳ニ雪フルヲミテ

藤頼保

230 ハルタチテヤナギエタニフル雪ハ

ネカヒシハナノコ、チコソスレ

【整定本文】

柳ニ雪フルヲミテ

藤頼保

ハルタチテヤナギエタニフル雪ハネガヒシハナノコ、チコソスレ

【本文に関する注】初句二字目「ル」は重書か。

【現代語訳】

柳に雪が降るのを見て

藤頼保

立春になってから柳の枝に降る雪は、(一度は目にしてみたいと)願っていたあの花のような心地がすることよ。

【作者】藤原頼保。生年未詳。治承三年(一一七九)没。従三位修理大夫家保の子。顕季の孫。正五位下中宮大進。右衛門督家成家歌合(久安五年)、中宮亮重家朝臣家歌合など親族主催の歌合に参加するほか、清輔が判者となった実国家歌合にも出詠。実国室は家成女であるから、実国家歌合もまた血縁による出詠であろう。なお頼保詠の数首は『治承三十六人歌合』に行念の歌として収載される。頼保の出家後の法名であろう。治承二年に催行された別雷社歌合の沙弥行念も頼保のことと考えられる。『詞花集』に一首入集するも、勅定により切り出された。そ

のほか『続詞花集』『言葉集』などに数首が残る。

【語釈】○ハルタチテ 立春に降る雪は、「春立つとききつるからにかすが山消えあへぬ雪の花とみゆらむ」（後撰集・春上・二・凡河内躬恒）、「はるたちてふるしらゆきをうぐひすのはなちりぬとやいそぎいづらん」（後拾遺集・春上・読人不知・一八）、「春たちてこずゑにきえぬしら雪はまだきにさける花かとぞ見る」（金葉集・春・二・公実）のように、花に見立てられることが多い。○ヤナキガエダニフル雪ハ 柳は春の景物として盛んに歌に詠まれた。ただし立春との組み合わせはそれほど多くはなく、一例としては「打霏ウチヒキ 春立奴良志ハルタチヌラシ 吾門之ワガカドノ 柳乃宇礼尔ヤナキノウレニ 鶯鳴都ウケヒスナキツ」（万葉集・一八一・九・読人不知）、「まつのうへにふるしらゆきも春たてばやなぎのころもほすかとぞみる」（六条斎院宣旨集・六）などがある。柳と雪を共に詠み込む例も多いわけではない。例としては「山もとに雪はふりつつしかすがにこのかはやなぎもえにけるかも」（新勅撰集・春上・二二・山部赤人）、「青柳のこずゑも今朝は白妙のいとよりまさる春のあわ雪」（壬二集・一一六二）などが挙げられ、柳の緑と雪の白という色彩の対比に焦点が当てられていようか。留意しておきたい先行歌としては「青柳の色はかはらで桜花ちるもとにこそ雪はふりけれ」（貫之集・四五九）「人の家にまらうどあまたきて、柳さくらのもとにむれゐてあそびするに、花ちりまがふ」がある。柳の傍らで散る桜を雪に見立てているが、これは柳に降る雪を桜に見立てる当該詠の逆である。当該詠はこの貫之詠を逆転させた発想とも言える。○ネガヒシハナ 柳と桜を共に詠む例は「みわたせば柳桜をこきまぜて宮ごぞ春の錦なりける」（古今集・春上・五六・素性法師）を始めとして非常に多い。その中で注目すべきは「むめがかをさくらのはなににははせてやなぎがえだにさかせてしかな」（後拾遺集・春上・八二・中原致時）である。梅・桜・柳の長所を、それぞれ香・花・枝と見なし、それらが一体となった様を夢想している。「てしかな」は実現が困難なことに対して用いられることが多いが、致時詠はまさに非現実的な夢想の花を詠じている。頼保が詠う「願ひし花」とは、このことではないだろうか。「ヤナギガエダニ」とわざわざ枝という語を詠み込むのも、先

の致時詠を意識した可能性がある。柳の枝に桜が咲くという現実にはあり得ない希有な花のことを、「前々より一度は見たいと願っていたあの花」と表現したのであろう。蓋し、「願ひし花」には言外に梅の香をも含んでいるのかもしれない。○コ、チコススレ 実際にはそうではないが、まるでそのような心地であることを表す。当歌では、柳に降りかかる春雪がまるで柳の枝に咲いた桜のように見える心境を詠っている。

【補説】雪を花に見立てる歌、また花と柳の取り合わせはとりたて珍しくないが、柳に降る雪を花に見立てる詠は他に見出し難い。おそらく、詞書にある通り、実際に柳に雪が降りかかるのを見て、前掲『後拾遺集』中原致時詠を想起し、この歌を詠んだのであろう。「願ひし花」とは、単に開花を待ち願っていた桜の花ということではなく、柳の枝に桜が咲くという、現実世界には存在しない景物を表現した措辞と捉えたい。初句にあるように、頃は立春であったのだから。頼保はいくつかの歌合に出詠しているものの、歌壇での大きな事績はなく、勅撰集からも歌は切り出されている。だが『言葉集』には四首入っているうえ、『治承三十六人歌合』の歌人にもなっている。当代での評価はそれなりにあったものと推察される。

(小林)